

大阪府福祉基金地域福祉振興助成金
(地域福祉推進助成・施策推進公募型事業)

「地域におけるヤングケアラー支援のモデル事業」

令和6年度 事例集



©2014 大阪府もずちゃん

目 次

事業概要	1
各団体の事業紹介	2
NPO 法人 FAIRROAD	2
特定非営利活動法人あそと	3
社会福祉法人八尾隣保館	4
NPO 法人やんちゃまファミリーwith	5
一般社団法人こもれび	6
特定非営利活動法人み・らいず 2	7
特定非営利活動法人ふうせんの会	8
特定非営利活動法人子ども・若もの支援ネットワークおおさか	9
社会福祉法人大阪福祉会	10
社会福祉法人大念仏寺社会事業団	11

地域におけるヤングケアラー支援のモデル事業

- (1) 事業名：大阪府福祉基金地域福祉振興助成金施策推進公募型事業「地域におけるヤングケアラー支援のモデル事業」
- (2) 事業実施期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日
- (3) 助成団体数：10
- (4) 事業の要件：ヤングケアラーについて、①又は②③を行うもの。なお、事業実施にあたっては、市町村等の他機関と連携して実施すること。
 ①社会的認知度向上の取組み（フォーラム・勉強会等）
 ②ピアサポートなどの具体的な支援の実施
 ③事業成果報告書の提出
- (5) 各団体の助成事業の概要
 ▶これまでの活動を活かし・発展させた事業
 これまでヤングケアラーと思われる子どもたちも含めた食事や学習支援、学校内居場所事業等を実施する民間支援団体が、今回の助成事業を機に、ヤングケアラーへの継続した支援を行うため、その支援スキルを活用し、ヤングケアラーにかかる相談、体験活動、居場所づくり等を行うとともに、行政等との連携会議や地域住民への啓発セミナー等を実施。
 ▶当事者（現・元ヤングケアラー）によるピアサポート事業
 当事者同士が安心して経験を語り合う「つどいの場」等の開催や、ピアサポートの充実や当事者支援で培ったスキルの周知等を実施。
- (6) 各団体の事業評価結果

団体名	事業名	事業評価
NPO法人 FAIR ROAD	「日常に寄り添い会話から始まる支援」ヤングケアラー孤立予防支援事業	S
特定非営利活動法人 あそと	高校内でのサードプレイスの設置によるヤングケアラーの潜在化予防支援	S
社会福祉法人 八尾隣保館	学習支援びはーと	S
NPO法人 やんちゃまファミリーwith	「ほっといたらアカン！子どもが子どもらしく生きる」を支える	S
一般社団法人 こもれび	『夢をあきらめない！』～ヤングケアラーと地域社会をつなぐ架け橋事業～	S
特定非営利活動法人 み・らいず2	ヤングケアラーの子どもたちが「自分」を優先し社会参加できるプロジェクト	S
特定非営利活動法人 ふうせんの会	ヤングケアラーのレジリエンスを高める支援モデル事業	S
特定非営利活動法人 子ども・若もの支援ネットワークおおさか	ひとりじゃない！ヤングケアラーの居場所と相談をもっと身近に～高等学校内に居場所と相談ブースを開設～	S
社会福祉法人 大阪福社会	『ハピネス』ヤングケアラー支援事業	S
社会福祉法人 大念仏寺社会事業団	ヤングケアラー支援事業「ウィズ」	S

【評価基準とその評価指標】

S：非常に高く評価できるもの、A：高く評価できるもの、B：一定の水準にあるが一部課題のあるもの、C：一定の水準にあるがかなり課題のあるもの、D：全般的に多く課題のあるもの

（参考）大阪府ホームページ 地域福祉推進助成『事業評価制度』

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o090020/chiikifukushi/kikin/jigyo-hyoka.html>

●事業計画

・通信制高校に介護や家事から解放された自分の時間を過ごせる場所を作り、学習支援や相談支援を行う高校内居場所（週1～2回）
 ・中学生以上のヤングケアラーを対象にした相談窓口を設置し、中退や卒業後も相談ができる出張居場所カフェ（西成区、港区、生野区、鶴見区）（各区月1回）
 ・区民や支援者へのヤングケアラーの啓発を目的に、ヤングケアラー支援に関する実践報告をするシンポジウム（西成区、港区、生野区、鶴見区）（各区年1回）
 <団体のこれまでの取組等>
 大阪府教育庁「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を受託し府立高校3校で高校内居場所カフェを実施。中学校内居場所事業や地域の居場所事業等も実施。
<https://fairroad.org/>

●事業実績

対象者：

- ・大阪府立桃谷高校(通信課程)に通う生徒
- ・当法人が運営している事業の利用者でヤングケアラー状態にある若者
- ・それぞれの区において実施するシンポジウムの参加者

参加（延べ）人数：校内1127名、地域160名、シンポジウム59名

実施回数：校内45回、地域45回、シンポジウム4回

内容：

桃谷高校内と若者たちが知っている地域の会館などを拠点に、ヤングケアラーが安心して過ごせる居場所や相談の場を提供。併せて同行支援や訪問支援等の個別対応。シンポジウムを開催し、ヤングケアラーの孤立予防に向けた地域支援体制について意見交換を行いました。

効果：

- 1) 孤立感の軽減と安心感の獲得
- 2) 学業継続・進路支援
- 3) 地域資源の活用力の向上
- 4) 自己理解と家庭内の支援ニーズの顕在化

工夫したこと・力を入れたこと：

子ども・若者の日常の中に、こちらから出向いていくこと。

困りごとの解決には、制度の存在や情報提供が欠かせません。けれども、声をあげにくいヤングケアラーにとって、まず何より大切なのは、「彼らの声と手が届く日常に支援があるかどうか」だと私たちは考えています。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

（利用者の声 アンケートより抜粋）

- ・友だちがいっぱいできたし、趣味や推しの話でたくさん盛り上がった。・友人ができました。・一人で来ても悩みを話せたこと・友達が出来たこと。・勉強できてよかった。・みんなが優しくった。・レモンティーが美味かった。・皆でカタカナシーした事
- ・お友達できた！楽しかった！・あたたかい空間・モモカフェで友だちが増えてから学校行きやすくなった。・人生初めての友だちができた。・食品たすかった。親も助かった。・学校行きたくないときもここがあったので嬉しかったです。

●2年間このテーマに取り組んだ感想

ヤングケアラーの支援特有の難しさは、ケアは「当たり前日常」であり困りごととして表に出ないことにあります。

ケアを通じて得た家事全般の能力や生活の様々なことを判断する能力などは、一見自立していると誤解されがち。後回しにしている自分の感情や自分のための時間や選択が育てる成長も、家庭内でのケアと同時に保障していきたい。また、ヤングケアラー状態に関する困りごとを把握できても、本人が制度の“主たる対象”ではないことに難しさを感じた2年間でした。



特定非営利活動法人あそと 高校内でのサードプレイスの設置によるヤングケアラーの潜在化予防支援

●事業計画

・学校内に全生徒が利用可能なサードプレイスを設置する、大阪府立高校3校内居場所カフェの実施（年80回）・生徒に関する情報共有や運営に関する質の向上を目的とした各学校との連携会議の実施（年9回）・ボランティア参加を促すことで府民のヤングケアラーへの理解を深めることを目的としたボランティア講座の実施（年2回）

＜団体のこれまでの取組等＞

大阪府教育庁「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を受託し府立高校2校で高校内居場所カフェを実施。その他、居宅介護事業、就労支援B型事業等を実施。

<https://npo-assort.com/>

●事業実績

対象者：府立高等学校に通うヤングケアラーの高校生

参加（延べ）人数：1448名

実施回数：70回

内容：府立高校内に全生徒が利用できるカフェを設置し①ヤングケアラー自身へのケアの提供②困難さの発見③卒業後の潜在化予防、を行う。校内のカフェにサードプレイスとしての機能を持たせることで、ヤングケアラーを含む高校生がリラックスした時間を過ごすことでケアされる。またカフェのスタッフとして専門職(社会福祉士)を配置することで、アウトリーチも合わせて実施することができる。在学中に培われた関係性は卒業後の当法人とのつながりとなっていく、卒業後の潜在化の予防につながる。実施校：門真西高等学校・茨田高等学校・成城高等学校校定時制の課程

効果：①リラックスした時間の中でヤングケアラー自身へのケアを提供した。②カフェ利用生徒とのコミュニケーションによりヤングケアラーの生徒が発見された。③卒業時に当法人の相談窓口を伝えることができた。

工夫したこと・力を入れたこと：

- ・生徒がリラックスして過ごせる環境をつくるために、生徒自身からの意見を取り入れながら環境の改善を重ねた。
- ・学校側との連携会議を定期的に実施し、生徒の状況についての共有をすすめ必要に応じて校内の専門職(SCやSSW)との連携も行った。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

・サードプレイスでのリラックスした時間を共に過ごす中で醸成された関係性が生徒からの家族に関する相談につながり、潜在化されていたヤングケアラーの発見に至った。

・家族との予定を優先しながらも、少ない時間の中でサードプレイスに訪れ、少しお喋りをしてから帰宅する高校生の姿が見られた。

・教員とヤングケアラー支援の視点を共有することが生徒への多角的なアセスメントにつながり、生徒の抱える様々な課題について福祉的な観点からの支援を実施することができた。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

高等学校内でのサードプレイスの設置は、高校生の抱える様々な課題の潜在化の予防につながると感じた。相談窓口ではなくサードプレイスとして設置することで、未だ自身の中での支援ニーズが高まっていない高校生とも出会うことができ、支援-被支援の関係となる前の段階で関係性作りを行うことができる。できあがった信頼関係は相談することへの敷居を下げさせ、困り感が比較的小さいあいだに支援につながる事が期待される。実際に当事業で出会った高校生が卒業後に困り感を訴えて当法人の相談窓口につながってくれたケースもあった。ヤングケアラーの潜在化予防においても、本事業は有効であると感じた。



●事業計画

・学習支援を通じた居場所の提供と相談の場（週2回） ・卒塾したこどもが集まれる場の開催（ピアサポート） ・居場所の外での体験活動
・タブレットを活用した繋がり確保と居心地の良い環境構築
＜団体のこれまでの取組等＞
母子生活支援施設等を運営。退所者へのフォローアップ、および、行政や地域の小中学校等との連携体制の中で、支援の必要な子どもの発見や発見後の連携を推進。
<https://yaorinpokan.or.jp/>

●事業実績

対象者：中学生・高校生以上 参加（延べ）人数：1122名 実施回数：89日

内容：母子生活支援施設職員だけではなく、学生スタッフ、心理の資格を持つスタッフなどと情報共有を行いながら協働してこどもたちと関わることで様々な視点を持ちながら支援を行うことができた。また、こども自らが調理を行う内容も取り入れることで楽しみながら時間を過ごすことが出来た。こどもの意見を聞き取り、取り組みの中に反映させることで、こどもが主体である環境を構築できた。体験活動を取り入れることにより、友達関係や学生スタッフとこどもとの関係性に良い変化が生まれた。様々な体験をすることで豊かな心の醸成につながった。

効果：家庭内や友達関係など様々な課題を抱えるこどもや、不登校児なども増えてきている中で、皆が主体となり楽しく過ごしている姿がよく見られる。休みがちのこどもも、レクの時間になると顔を出してくれたり、メイン行事を行うときは参加をしてくれたりなど、確実にこども達の居場所になってきているように感じる。また、親子関係への介入も状況に合わせて実施することで、少しずつではあるが良い変化が生まれていると感じる。

工夫したこと・力を入れたこと：中学生と高校生が居場所に来ていることもあり、意図的な環境整備を行った。また、高校生には中学生とは違う役割を担ってもらい、達成感や自己肯定感の回復に繋がるよう努めた。体験活動の中で日頃中々経験ができない内容を取り入れ、非日常体験等を実施した。こども達も普段とは違うレクに非常にうれしそうな表情をしていた。学生スタッフとのコミュニケーションを強化することにより、スタッフの悩みも知ることができ、一緒に環境改善が図れるような取り組みを行った。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

前年度と比べると、こども達から進んでお手伝いなどをしてくれるようになり、とても楽しんでくれているように思う。こども同士が仲良くなった分トラブルもあったりはするが、その都度学生スタッフや職員が介入し、話を聞くことで、自分の中で振り返りながら解決に向かうなど良い経験をしながら成長をして言っているのではないかと感じる。また、保護者からも、「生活リズムが整ってきた」「進んで机に向かうようになった」「コミュニケーションが増えました」など肯定的な意見ももらっている。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

様々な年齢のこどもや保護者と関わることで、今まで見えなかった悩みや葛藤を知ることができ、一緒に考えることができた1年であった。体験活動を実施することで、普段とは違ったこども達の様子も知ることができるなど、こども同士やこどもとスタッフとの関係性も深まったのではないかと感じる。また、様々な学生に対してヤングケアラーについての周知活動を行うことで、関心はあるがどうしたらよいか分からないという疑問に答えることができたのではないかと感じる。



NPO法人やんちゃファミリーwith 「ほっといたらアカン！子どもが子どもらしく生きる」を支える

●事業計画

・地域住民への啓発フォーラムの開催（年1回）・地域の支援者たちが集まる講習会・勉強会（年12回）・小学校（2校）での居場所づくり（週1回）
・相談窓口の設置（月4回）、支援員コーディネーターや支援員による個別支援（随時）・人材育成のための養成講座（年1回）
・啓発フォーラム開催及びヤングケアラー支援のためのサービス開発ができるよう、関係者による会議を定期開催。その中で、松原市で実施した「松原市ヤングケアラー実態把握調査」のアンケートによる必要な事業の実施。（随時）
＜団体のこれまでの取組等＞
大阪府教育庁「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を受託し府立高校1校で高校内・外居場所を実施。松原市地域子育て支援事業の受託、子ども食堂、おやこ食堂など子どもの居場所に関する事業や子育て・教育に関する相談事業等を実施。行政や市社協等と連携。
<https://yanchama.net/>

●事業実績

①【小学校内での居場所】

対象者：ヤングケアラーとされる児童を始め、家庭環境等による様々な課題を有する児童、実施回数：97回、参加者（延）：2,955人、内容：居場所では、地域の大人や友だちと安心して交流し、相談できる場を提供するとともに、自分の気持ちを話しやすい環境を整える。効果：学校で居場所を設けることで児童が安心できる時間を増やし、学校生活を快適に過ごせるよう支援する。これにより、児童の学校滞在時間が増え、支援の成果が他の小中学校での居場所支援の充実へとつながる。工夫等：毎月、学校と打ち合わせや振り返りを行い、居場所づくりの展開や子どもたちの安心・安全な環境づくりについて意見交換をしている。また、ケース会議に参加し、関係機関と情報交換を行っている。

②【相談支援窓口】

対象者：ヤングケアラー本人をはじめ、周囲の方や関係者、また「もしかするとヤングケアラーかもしれない」と心配されている方。参加者（延）：11人、内容：地域から寄せられる相談を受けつけ、必要に応じて支援を行い、関係機関へとつなげる。効果：ヤングケアラーからの相談は少ないものの、学校や地域、行政からの相談は増加している。相談窓口にとどまらず、課題解決に向けた連携拠点としての役割を果たしつつある。力をいれたこと：相談時間の拡大

③【matsucoサポーター養成講座（松原の子どもたちを支えるひとづくり）】

対象者：子育て支援、ヤングケアラー、子ども食堂などに関心のある市内在住の方、参加者（延）：63人、内容：地域で子どもたちを支える人材を養成する講座を開催。効果：2年目となる今回は、再受講者がスキルアップの機会として活用し、新しい受講者も加わった。少しずつではあるが、地域で子どもを支えるサポーターが着実に広がっている。力をいれたこと：講座では、子どもの寄り添いかたや、発達障害のある子どもへの理解と対応などを学び、より効果的な支援ができるよう努めた。特にこの学びに力をいれ、実践的な支援につなげている。

④【フォーラムの開催】

対象者：ヤングケアラーの問題について関心のある方、子ども食堂や子どもサロンを開催している方、または開催予定の方、参加者：67人、内容：元当事者の方を招き、パネルディスカッション。松原市での取組の報告。効果：支援のあり方やつながりの大切さ、そして地域の役割について、参加者と共に考える機会となった。工夫：教育や福祉に関わる方々に、参加を呼びかけた。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

「matsucoサポーター養成講座」参加者の声

・昨年度も受講しましたが、いつも学びがあります。・今日学んだことを支援に役立てたいと思います。

「小学校の居場所」学校からの声

・ヤングケアラーや家庭事業を抱え不登校傾向のある児童が、「居場所」でほっとできる機会が増え、ニーズも高くなってきている。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

1年目は、ヤングケアラーについて学び、必要な支援を明確にすることに力を入れた。講師を招いて勉強会や研修会を開催し、相談支援窓口も開設。当事者からの相談はなかったものの、地域の方やスクールソーシャルワーカーからの相談が寄せられ、少しずつヤングケアラーという言葉が浸透し始めたことを実感した。

2年目は、学校と連携し、小学校内に居場所を設けることで、当事者が話しやすい環境づくりに取り組んだ。地域の大人が子どもたちと遊びながら会話をすることで、子どもたちの心が自然とほぐれていく様子を感じた。ヤングケアラーの支援は非常にデリケートな問題であり、「ヤングケアラー＝かわいそうな子」という認識にならないよう配慮が必要だった。そのため、元ヤングケアラーの話を聞き、どのような支援が求められるのかを深く考えることを大切にしていた。

3年目に入ると、ヤングケアラーに関する相談が増加。母が病気で家事を担う子どもがいる家庭の相談が寄せられ、地域のケアマネジャーや医療センターからの相談も入るようになった。支援の必要性がより明確になり、関係機関との連携が一層重要であることを実感している。また、小学校での居場所づくりでは一定の成果があり、行政も全小中学校への居場所設置に向けて動き始めたことを嬉しく思う。さらに、フォーラムやmatsucoサポーター養成講座をきっかけに支援に参加する人が増えたことも心強く、支援の輪が広がっていると感じている。



Matsuco
サポーター
養成講座



フォーラム



小学校
居場所

●事業計画

・中学校内居場所(週2回)・体験活動(月1～2回)・活動発表会(年1回)・専門職研修(月1回)・相談窓口(月4回)・シンポジウムの開催(年1回)
 <団体のこれまでの取組等>
 大阪市子ども自立アシスト事業の受託。居宅介護支援、児童発達支援、放課後等デイサービス等の運営。また、自主事業でフリースクールや子ども食堂を運営し、受託事業などと共にさまざまな課題を抱える子どもたちの支援に取り組む。
<https://www.kmr.jp/>

●事業実績

①居場所(校内居場所が主)
 実施回数: 75回
 対象者: 中学生、延べ参加人数: 324人
 内容: 学習支援やソーシャルスキル支援、相談
 効果: 延べ人数において当初計画の200人を大きく上回り、子どもたちの居場所としての機能を果たしたと言える。

②体験活動(体験イベント、音楽教室 [KMC])
 実施回数: 41回
 対象者: 小学生～高校生、延べ参加人数: 277人
 内容: 農業体験、映像ワークショップなどのイベント活動、専門講師と法人スタッフによる音楽教室 (KMC)
 効果: いろいろな体験や講師から学びを得ることができ、子どもたちの自信や小集団におけるコミュニケーションスキルや社会モデルの獲得につながった。

③活動発表会(こもれび音楽祭)
 実施回数: 1回
 対象者: KMCの子ども・地域住民・保護者・スタッフ。参加者: 91人
 内容: 地域住民や保護者などが参加できる活動発表会。
 効果: たくさんの観客から応援コメントや拍手などをもらうことで、子ども自身が主役となり、子どもたちの自信・意欲の醸成につながった。

④専門職研修(SSWのための実践講座)
 実施回数: 12回
 対象者: 子どもに関わる専門職、延べ参加人数: 304名
 内容: SSW、教員、区役所職員等に対する応対技術の向上及び啓発活動。
 効果: 毎回事例をつかった実践的なグループワークを実施することにより、専門職にヤングケアラーに関する意識付けや応対力を高める効果があり、対策などさまざまな情報共有もできた。

⑤啓発活動(シンポジウム)
 実施回数: 1回
 対象者: 教育関係者など子どもに関わる専門職、参加人数: 44名
 内容: 元ヤングケアラーの講演、専門家のパネルディスカッション
 効果: 「ヤングケアラーに対する自分の役割は何か」を、多くの参加者に考えてもらう機会となった。

●子ども自身・参加者・保護者・教員等の様子・感想や変化

<子ども自身>
 ・居場所に定期的に通えるようになり、スタッフと雑談をしたり同年代との仲間づくりができた。
 ・さまざまな体験を通して社会を知り、自分の可能性や将来の選択肢が広がった。
 ・おいてある広報物を見て、自分がケアラーかもしれないと思った。
 ・音楽祭では、最初はステージで発表することも緊張したが、だんだん自信が出てきて演奏を楽しむことができるようになってきている。
 ・音楽やバンド活動など共通の活動を通して仲間ができた。

<保護者>
 ・家では体験させてやれないことを体験させてもらいありがたい。
 ・学校や家庭では見られない子どもの活躍した姿が見られてよかった。
 ・子どもがひとりになる時間が減り、他者と交流できてよかった。
 ・子どもの笑顔を見て保護者自身も前向きになった。

<教員や関係機関>
 ・色んな背景を抱えた子どもたちが舞台上に立って活躍していることがすごいこと。感動した。
 ・子どもそれぞれの背景を知ることができた。
 ・定期的に通えるようになり、子どもの表情が明るくなった。また教職員と子どもが接する機会が増えた。
 ・企業や講師より、子どもたちにいろいろな機会を提供したい、継続的な支援をおこないたいとの声が寄せられている。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

3年間取り組んでみての難しかったことは、本事業についてヤングケアラーの子どもたちに直接周知することです。子ども自身や周囲が気付いていないヤングケアラーの子どもたちが多くいること、“ヤングケアラー”の文言を前面に出しにくいことがありました。しかし、段々と支援者や教育関係者にヤングケアラーや本事業の存在が周知され、必要な子どもに支援を届けることや、本事業を活用して潜在的なヤングケアラーの発見に至りました。

ヤングケアラーとしての課題の解消にも難しさを感じました。経済的支援や福祉支援に繋がり負担が軽減したケースもありますが、保護者や、ひとり親家庭の多忙さなどはすぐに解消できる課題ではありません。子ども自身が語ることができなったり、課題の解消を求めているなかったりもします。居場所を開催し、体験や音楽など子どもたちが“楽しい”と思えることを軸にすることで、子どもや保護者と定期的・継続的に関わり続けることができました。その関わりの中で、子どもたちの語りが出てきたり、保護者も外部支援に対しての安心感が培われたりすることに繋がったと感じます。

子どもたちが活動を楽しみ、キラキラ輝いている姿を見たり、一緒に体験したりすることで、教職員や支援者、企業や地域の方にヤングケアラーの子どもたちの将来の可能性や支援の必要性を体感していただけたと思います。



<校内居場所 [ぶあぶ] > <体験活動 [農業体験] > <体験活動 [音楽教室] > <活動発表会 [音楽祭] > <専門職研修 [SSW実践講座] > <啓発活動 [シンポジウム] >

特定非営利活動法人み・らいず 2

ヤングケアラーの子どもたちが「自分」を優先し社会参加できるプロジェクト

●事業計画

・啓発（実践報告会）の開催（年1回） ・調理や食事を通じた体験学習、相談の機会の提供（自分時間プロジェクト 月4回程度）
・仲間たちと協力し、やってみたいことを企画、実践し、自信を回復する機会の提供（チャレンジプロジェクト 月4回程度）
・多様な職種の話や聞き、将来を考える機会の提供（あきらめずにチャレンジしていようプロジェクト 5回） ・地域連携担当の配置（週1回）
・働くイメージや意欲を高めるため、実際にボランティア活動や仕事体験ができる機会の提供（しごとチャレンジプロジェクト 40回程度）
<団体のこれまでの取組等>
堺市ユースサポートセンターの受託。計画相談支援、居宅介護、放課後等デイサービス、就労移行支援等の運営。日本財団の助成により子ども第三の居場所等を運営。
<https://me-rise.com/>

●事業実績

プロジェクト：

対象者：自分のやりたいことよりも家庭のことを優先せざるを得ず「自分時間」を確保できない子ども、二次的な障壁として社会参加の意欲や機会が減っている子ども

①「自分時間」②「チャレンジ」プロジェクト

開催120回 のべ参加者数700名

内容：家庭から離れて自分を優先する時間を過ごせる居場所、やってみたいことを仲間と企画実践する機会を提供

対象者：将来を考えることを諦めている子どもたち

③「チャレンジしていよう」④「しごとチャレンジ」プロジェクト

インタビュー6社 体験12回 のべ参加者数40名

内容：多様な職種の専門家にインタビューをする機会、ボランティア活動や協力企業でのしごと体験機会を提供。

対象者：行政、教育、福祉、医療関係機関、地域の方など

⑤啓発（実践報告会と意見交換会）

実践報告3回 参加者78名 ほか

内容：連携担当を置き、実践報告など関係機関との連携を強化しヤングケアラーの子どもへの接点を増やし、地域社会の理解や取り組みを推進。

効果：①②継続して利用するにつれて、何を誘っても興味ややる気を見せなかった子どもが、やってみたいことや興味のあることを言えるようになってきました。「どうせわかってもらえない」と話すことを諦めていた子どもが、自分の気持ちを伝える工夫ができるようになりました。気持ちを伝えたい相手が増えました。

④しごと体験後は将来やってみたい仕事が具体的な内容に変化しました。アルバイトなどで働きたいと意欲をもつ子どもが増えました。

⑤実践結果のこどもの変化や課題について共有し、ヤングケアラーの子どもに必要な支援について地域で議論できました。

工夫したこと・力を入れたこと：①②③④個別で話を聞く時間と、他の子どもも合わせて一緒に過ごす時間のどちらも持つように環境やスタッフ体制を工夫しました。自分で決めるために、多様な人や価値観に触れる機会提供と、ささいなことでも「あなたはと思う？」と気持ちを聞く機会を増やし、自分で決める習慣づくりに力を入れました。⑤子どもの変化や言葉とこちらの関りの工夫を整理した成果物を作ることで、モデル事業として実践したことを他機関にも伝えられるよう工夫しました。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

子ども：

「べつにやりたいことない」「これ言ってもしかたない」「親に話してもわかってもらえない」と希望を出すことを諦めていた子どもたちが、「聞いてください」「みんなと一緒に○○やりたい」「親にどう言ったらいいか一緒に考えて」と自分の気持ちや希望を人に伝えたいと思うように変化していきま

した。

保護者：

「これくらい家でできるから大丈夫」「人にわかってもらえない」と人に頼らず相談もできなかった保護者たちが、「わたしもしんどくて…」「学校に一緒に来てもらえませんか」と困ったときに相談できるようになりました。

参加者：

「知らないって罪なことだ。知ってもらって大事」「気にかけている人が地域にすることが大切ですね」などヤングケアラーの子どもたちの声を知り地域でできることがあるという意見が出ました。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

1年目は他の子どもと一緒に過ごすより自分の時間を過ごすことで精いっぱいだった子ども達が、継続するにつれて希望を言えるようになり、他の子どもと一緒に活動することへ意欲的になるなど大きな変化がありました。一つの企画体験をすると、そこから派生してこれもしてみたいなどどんどん興味関心が広がり、地域へのおまつり出店参加が「あたりまえ」になる、しごと体験に行けるなど社会参加の幅も合わせて広がりました。ヤングケアラーの二次的な障壁として社会参加の意欲や機会が減っている状態が課題であり、居場所や体験活動があれば子どもたちの意欲は高まっていくことが再確認できました。

また、初めは「大丈夫です」と話していた保護者も、継続して話を聞くことで徐々に子どもの相談だけでなくご自身のことも相談して下さるなど話す内容が変化していきま

した。子どもも保護者も、日常的に顔を合わせて近況を話すことで関係性が作られ、「あなたはと思う？」と問われ続けることで自分の気持ちを表現する力が伸びていくことが実感できました。意見交換会で意見が出よう、気にかけている人が地域にすることが大切であり、今後も地域でこのような関りのできる場所が必要だと感じました。



特定非営利活動法人ふうせんの会 ヤングケアラーのレジリエンスを高める支援モデル事業

●事業計画

- ・つどい（ハイブリッド）・ふうせんカフェ（オンライン）の開催（各年6回）・ピアサポーター研修の実施（年2回）
- ・大阪府域のヤングケアラー・若者ケアラーおよび支援者を対象とした相談支援として相談窓口の設置、ピアスタッフと専門職による相談対応

- ・啓発活動としてヤングケアラーを知るセッションの開催（月1回）及びひらかた社協ふくしフェスティバルへの参加（年1回）

<団体のこれまでの取組等>

ヤングケアラーの当事者の会として、ヤングケアラーのピアサポートや啓発活動、関係団体との交流・連携などを実施。大阪市ヤングケアラー寄り添い型相談支援事業受託。大阪府教育庁「課題を抱える生徒フォローアップ事業」を受託し府立高校2校で高校内居場所カフェを実施。

<https://ycballoon.org/index.html>

●事業実績

対象者：府内を中心とする現・元ヤングケアラー・若者ケアラー

参加（延べ）人数：195名（「つどい」「ふうせんカフェ」）

実施回数：各6回（「つどい」「ふうせんカフェ」）

内容：

○つどい：年6回（奇数月）開催。現・元ヤングケアラー・若者ケアラーが集まる場。対面とオンラインを併用。

○ふうせんカフェ：年6回（偶数月）開催。テーマを設け、5名ほどの少人数で話をするオンラインサロン。

○ヤングケアラーを知るセッション：毎月オンラインで開催。ヤングケアラーについての正しい理解を促進し、支えるための地域力向上を図る。

○ピアサポーター研修の実施：現・元ヤングケアラー・若者ケアラーの運営スタッフ対象。

効果：

「つどい」「ふうせんカフェ」を継続的に開催することで、リピーターと新規参加の方、両方からのニーズが高まっています。ブランクを経て参加される方もあり、継続しているからこそ信頼構築の成果も感じています。参加者にとっての安心・安全の確保と、孤立の解消に寄与しています。工夫したこと・力を入れたこと：

「つどい」では参加者が安心して参加できるよう、ルールを設けています。

①ここで聞いたことは外で話さない ②他の人の話を否定しない

③他の人の話をささげない ④話したくないときは話さなくてよい

運営には元ヤングケアラーであるピアスタッフも参加しており、当事者同士ならではの寄り添いも大切にしています。ピアスタッフが自身の経験を活かして活躍できるよう、ピアサポーター研修の実施もしています。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

「つどい」参加者の声（事後アンケートより）

・自分だけじゃない、独りぼっちじゃない、という気持ちになれました。

・「ここでは正直に心の中を話しても話さなくてもいいんだ」という安心・安全が守られた場所にいる、ということが、こころの安らぎになります。

・ヤングケアラーであった自分のことも包み隠さず話せるからこそ、とてもありがたい場所になっています。また参加したいです。

・この集まりでなかったら話せなかったことが沢山ありました。秘密が守られているという安心感があって、お話しできて本当に助かりました。

・他では話づらい話を聞いてもらえる事で、気持ちの整理が出来ます。

・参加することで、少しずつ自分の傷が癒されているように思います。

・毎回いろいろな経験をされている方のお話を聞くことで、帰宅後も少し家族に向き合えるような気がします。

●3年間このテーマに取り組んだ感想

この3年間でヤングケアラーの周知も進み、より多くの当事者・支援者の方たちに「つどい」に参加していただくようになりました。2か月に一度のつどいでは話し足りないとのニーズから始まった「ふうせんカフェ」も安定的に継続することができました。また、はじめは参加者だった当事者の方が運営側に回ってくれるようになる等、ヤングケアラー自身がレジリエンスを高め、その力を循環できるシステムが自ずと構築されました。これはヤングケアラーの方たちが元から持っている力のおかげだと感じています。私たちはそのサポートとして、必要な研修の機会を設け、広く一般の方にヤングケアラーを理解し、支える力となっていただくための啓発活動にも引き続き努めてまいります。



●事業計画

・ヤングケアラー及び元ヤングケアラーの声を届け、ヤングケアラー認知度向上に繋がるフォーラムの開催（年1回）・ヤングケアラー当事者及び関係者に対する相談支援活動として、相談窓口の設置、家庭訪問、面談、SNS相談等・高校内等における居場所支援＆個別相談・関係者（教職員、SSW、SC）等と情報交換やケース会議を定期的の実施
＜団体のこれまでの取組等＞
大阪府教育庁「課題を抱える生徒フォローアップ事業」、河内長野市生活困窮者世帯等の子どもの学習・生活支援事業、富田林市ひきこもり相談窓口等の受託。
<https://nw-osaka.com/>

●事業実績

対象者：ヤングケアラー、ヤングケアラーとなる可能性のある子ども、元ヤングケアラー、ヤングケアラーに関わる関係者等
延べ人数：968人（信太高等学校・Topic・虹いろサロンこんごう・講演会の合計）
（信太高等学校での延べ人数カウント方法：昼休みと放課後室の場合は「2」とカウント。同日、昼休みと放課後室のAさん→2人、放課後室のBさん→1人。）
実施回数：89回（信太高等学校45回・Topic38回・虹いろサロンこんごう5回・講演会1回）
内容：①ヤングケアラーを様々な世代や地域の人々に広く知ってもらうための講演会を開催。
②ヤングケアラーのニーズ把握に努め、面談、メール相談、SNS対応等、富田林市を中心としつつも、南河内地区を包括した支援を実施。
③大阪府立信太高等学校内での居場所及び相談活動をおこなうことで、ケアラーに関する課題に対し、ワンストップの対策に努める。
④Topic（富田林市きらめき創造館）や虹いろサロンこんごう（富田林市役所金剛連絡所北側）の施設を使用し、ヤングケアラーのための居場所及び相談支援を実施。
効果：①講演会に向けて、富田林市内小・中学生の全校生徒とその保護者にチラシを配布。支援活動について周知をおこなうことができた。また講演会では前年度に引き続き、NPO法人ふうせんの会から元ヤングケアラーの方に登壇いただき、当時の体験談を語ってもらうことで、支援の必要性や身近な事柄であると認知してもらう機会となった。
②ヤングケアラー当事者及び関係者に対し、SNSを通して（InstagramやX等も含む）支援をおこない、一定数の相談に対応した。
③大阪府立信太高等学校では、ヤングケアラーやそれに付随する不登校、高校中退、生活困窮等にも関わり、支援を継続しておこなうことができた。
④Topic・虹いろサロンこんごうを拠点とした、ヤングケアラーのための居場所支援及び相談支援活動では、継続して子ども達が来所した。
工夫したこと・力を入れたこと：
・本事業の配布物を作成する際、ヤングケアラーのイラストを手がけるイギリスの作家の方に直接連絡を取り、使用許可をもらった。このイラストを通して、少しでも配布物に目を通してもらえるよう工夫した。
・SNSを通じた支援は時間の制限が無くなり、職員の疲弊に繋がりがやすい。しかし、子ども達の要望も多いことから、枠組みに捉われない支援を実施及び継続することで、何かあった際の緊急時の連絡や普段の様子の見守りのツールとして、支援には欠かせないものとなっていった。また、時間や場の制限により対面時にはできなかった丁寧なケアをSNS上で実施することができた。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

・ヤングケアラーに付随した課題（不登校や高校中退等）は様々で、支援の幅も多岐にわたることが多かった。子どもや教員等、それぞれの立場の人々が支援を求めており、日々関わりながら一緒に目の前の課題と向き合ってきた。そのおかげもあってか、生徒達は毎年、年度が変わるシーズンには、居場所の卒業を惜しむ声が多く寄せられる。また、その生徒の保護者からもお世話になったとお礼の言葉をいただいた。
・ヤングケアラーやその恐れのある子ども・若者達にとっては、相談や支援を受けるということは、精神的にハードルが高かったと思われるが、身近で『なごめる』居場所に拘ってきただけで、みんなの心の拠り所となったと現在になって感じられる。
・他にも行政や教育機関、社会福祉協議会との支援方針の決定、情報交換、見学受け入れ等の多岐に渡る協働が実現できたことで、今後の支援のあり方を一緒に検討する機会となった。
・生徒たちからのメッセージ（一部紹介）
・去年はいっぱい迷惑もかけたけど、確実にけんけんといっぱい助けられた1年でした。あとちょっとしか「なごみ」行かれへんのホンマに悲しい。でも、合間見つけて絶対富田林まで行く！
・けんけん！また学校で会えると思うけど、ほんま2年間ありがとね友達関係とか家のこととかで、私の居場所なんかないんだって思ってた時に「なごみ」に出会えてほんとに今となっては、私にとってなくては生きていけないぐらい大好きな、自分の素を出せる場所になりました。「なごみ」という場所を作ってくれて、ありがと。いつもふざけてるけど、誰よりも周りのみんなを見ていて、何かあった時はすぐ察してくれて、でも話すの気まずくないぐらいのテンションで話しかけてきてくれて、笑顔にしてくれて本当にありがと。また富田林にも時間が合えば行くね。
・「なごみ」ものすごく学校生活で心の救いになっていました。これからも応援しています。

●2年間このテーマに取り組んだ感想

・当法人では、ヤングケアラーの認知向上を掲げて、広報活動、フォーラム開催、相談活動と居場所運営に継続して取り組んできた。国や地方自治体、メディア等から発信される情報を通して、ヤングケアラーの概念を広く周知がなされている状況にあるが、現場の子ども・若者達の中には、どこか自分事とは切り離している当事者も一定数見られる。ケアを家族から一任されることは、子どもや若者自身にとって、当たり前の日常として捉えているのではないかと。また、支援を受けることで「迷惑をかける」、「恥ずかしい」といったことに躊躇し、支援とは距離をとっているかもしれない。ヤングケアラーの当事者には、もっと相談や支援を身近に感じてもらえるよう、今以上の広報活動が必要となるだろう。
・様々なケースと関わる中、民間の法人だからできること（SNSによる夜間の相談や家族・学校の先生とは違う視点の関わり等）に重きを置いて取り組んだこともあり、当事者達にとって支援者は、話しやすい存在であったと思う。高校内の居場所においては、他愛もない会話の連続だったかもしれないが、長時間過ごしたことで、信頼関係の構築にも繋がっていった。そこでは、子ども達の成長だけでなく、支援者が若い世代との関わり方を学ばせてもらった。当事者と支援者が共に進化した2年間だったと思う。



●事業計画

- ・ヤングケアラーにならざるを得なかった背景を理解し、その原因を取り除くために社会福祉士や心理士、弁護士等が協働して課題解決を目指す。
- ・ヤングケアラー当事者や世帯が気軽に相談できる来所面談、電話・オンラインの相談窓口の設置
- ・学習支援、共同調理・食事、社会体験をする集いの場を設け、世帯支援へとつなげる
- ・元ヤングケアラー等を招いたセミナーの開催

＜団体のこれまでの取組等＞
母子生活支援施設「ハピネス・ハーク」等を運営。退所者へのアフターケアや行政や地域の小中学校等との連携の中で、支援の必要な子どもの発見やサポートを行う。
<http://osakafukushikai.or.jp/>

●事業実績

対象者：92名
参加（延べ）人数：380名
実施回数：56回
内容：◆来所面談や電話相談、オンライン相談に随時対応
◆その他イベント型の集いの広場を月1回実施
（クッキングや自衛隊見学、BBQ、クリスマス会、グランドゴルフ大会等）
◆ヤングケアラー向けの弁護士セミナーを年2回、職員・関係機関向けの有識者によるセミナーを年2回実施

効果：社会福祉士や保育士、栄養士、弁護士等様々な専門職が配置されていることを強みとし、ヤングケアラーが抱える課題の根本的解決を目指し、世帯への介入や法的な助言、関係機関との連携を実施し、適切な機関や支援につなげることができました。

工夫したこと・力を入れたこと：LINEを活用したことでヤングケアラーたちとのやり取りのハードルが下がり、気軽に連絡を取り合うことができました。時代や子どものニーズ・興味関心に合わせた対応、また子どもたちが抱える背景に沿って学んでほしいこと、経験してほしいことを集いの広場に取り入れました。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

ヤングケアラーとの関係を継続すると、毎日の様に施設を訪れ、相談がなくても自宅のリビングの様に過ごして帰る子もいます。自分の居場所としての認識が定着しているのを感じます。「次はこんなことをしてみたい！」と積極的な意見も出る様になりました。

関係性の深まりにより、デリケートな家庭の問題や自身の悩みを打ち明けてくれた事で、各専門分野から助言を行い、行政とも連携し問題解決へとつながった事案もあります。当事者のヤングケアラーは「あの時相談してなかったら、今頃どうなってたんやろう。ほんまに相談してよかった」と笑顔で話してくれました。

●2年間このテーマに取り組んだ感想

活動を通して、信頼関係の構築や保護者へのアプローチの難しさ等を痛感する毎日ですが、大人びた表情のヤングケアラーたちが活動中に無邪気で楽しそうな表情を見せてくれたとき、困ったときや悩んだときに真っ先に助けを求めに来たとき、諦めずに声をかけ続けることの大切さやヤングケアラーたちの居場所を提供することの大切さを改めて感じています。適切な機関や支援につながったことで安堵する子どもたちの姿を見ると、すぐに効果はなくても根気強く関わる大人の存在が必要であると痛感します。ヤングケアラーたちが前向きに自分らしく、人生を選択していくことができるよう寄り添いながら見守ることが私たちの大きな役割であると感じています。



縁日



初詣



スキー



グランドゴルフ



セミナー



弁護士セミナー

●事業計画

・「ボ・ドーム大念仏」を退所した児童や、地域のひとり親家庭の児童、不登校児・引きこもり等のヤングケアラー又はその可能性のある子どもを対象とした学習支援（週5日）、子ども食堂の開催（週1回） ・「ひらのこどもみんな食堂食材センター」を運営し、関係機関から提供のあった食材を保管し、こども食堂開催日時に合わせて平野区内、近隣のこども食堂へ配布する。・関係機関と情報交換会や連絡会などを行い、連携しながらヤングケアラーの個別支援にあたる。

<団体のこれまでの取組等>

母子生活支援施設「ボ・ドーム大念仏」等を運営。退所した児童に対するアフターケアとして学習支援活動を行い、退所世帯の状況把握・相談支援を行っている。

<http://www.dsw.or.jp/>

●事業実績

【対象者】入所児童・地域の児童とその保護者等

【参加（延べ）人数】2,533人※入所児童を除く

【実施回数】219回

【内容】

・居場所づくり(学習支援「ウィズ学習会」こども食堂「ウィズキッチン」)

・ひらのこどもみんな食堂 食材センターの運営

・機関連携(平野区役所・平野区社会福祉協議会・各関係機関)

【効果】

・乳幼児から小中高生、18歳以降の若者から保護者まで幅広く利用できる居場所づくりが行えた。

・平野区こどもの居場所ネットワークを形成し、平野区内のこどもの居場所(こども食堂等)の事業所同士が繋がる仕組みづくりを行えた。

・個別支援やネットワーク化を平野区役所、平野区社会福祉協議会、平野区、あるいは平野区域外の各関係機関と協働しながら進められた。

【工夫したこと・力を入れたこと】

・こどものニーズを把握し、居場所づくりに反映させること。

(こども食堂のメニュー・オータムキャンプ等)

・ネットワーク登録団体や地域とのかかわりを頻繁に行うこと。

●子ども自身・参加者・保護者・教員 等の様子・感想や変化

ウィズ学習会では集中しやすく、わからないところを先生に聞くとすぐに教えてくれて、もう一度利用したいと思いました。

ウィズキッチンでは全ての料理がとてもおいしく、栄養バランスが整っており、家ではあまり作ることができない料理ばかりでもっと食べたいと思っています。

オータムキャンプ2024で受験生の私はあまり勉強の息抜きができていませんでしたが、キャンプに誘っていただき勉強でたまっていたストレスを発散できたと思います。(中学3年生 H.Hさん)

●2年間このテーマに取り組んだ感想

元々は学習支援を計画して始めた取り組みだったが、参加児童と地域のニーズを把握しながら少しずつバージョンアップを重ねてきた。参加児童にとって、より良い居場所をつくることと、地域で子どもたちを見守る仕組みづくりができたと思う。手探りだったが、前に進むと支援してくれる人と関係機関が見つかり、さらに前に進むと、また新たな支援の手が見つかるということの連続だった。たった2年間だったが、スタッフや地域の方々の協力もあって大きな成果が上げられた。来年度もさらに前に進み、地域の中で地域全体で子どもたちを見守っていきたいと思う。

